

慢性疾病児童に対する学習支援の経験

～対面による支援とリモートによる支援の利点の比較も含めて～



愛媛大学医学部医学科 1回生¹⁾、4回生²⁾、3回生³⁾、5回生⁴⁾ 看護学科 2回生⁵⁾、Children Supporters

山下真奈¹⁾、辻本拓真²⁾、河瀬優里¹⁾、清水杏実¹⁾、藤原峻太³⁾、山下歩佳⁴⁾、河原彩乃⁵⁾、樽岡由里香⁵⁾

愛媛大学大学院教育学研究科 榎木暢子 認定NPO法人ラ・ファミリエ 西朋子、越智彩帆

愛媛大学大学院 小児科／地域小児・周産期学 森谷京子、森谷友造、赤澤祐介、高田秀実、檜垣高史

病気療養中の子どもたちに教育は必要？

病気療養中の子どもたちは…

患儿

であると同時に

成長段階にある一人の人間



病気の子どもたちの
社会的自立を
目指して…

医療・福祉・教育が連携をとりアプローチ

認定NPO法人ラ・ファミリエが行う学習支援事業

慢性疾患のある子どもは

- ・学習への不安
- ・病気や治療への不安
- ・治療による生活規制等のストレス

などを抱えている・・・



慢性疾患の子どもたちの心身の悩みに寄り添った教育
= 病弱教育

認定NPO法人ラ・ファミリエでは、小児慢性特定疾病児童等自立支援事業の「その他の自立支援事業」として、学習支援の実施している

これまでの学習支援の様子

研究室で



サロン(地域子どもの
くらし保健室)で



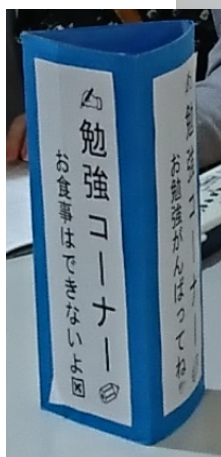
病室
(ベッドサイド)で



外来の
待ち時間に



一部はWEB
も使って



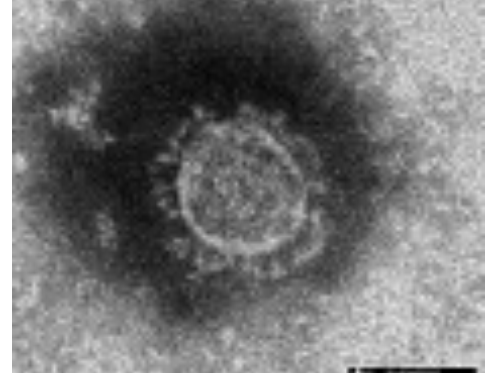
今、オンラインによる学習支援が進んでいる！



COVID-19によるパンデミック



オンライン導入化の促進が学習支援にも



国立感染症研究所HPより

学習支援における対面と比較した
オンラインの**利点・弱点**は
具体的に何だろう？



これらを理解することで**質の高い学習支援**を行えるのではないか？



対面とオンライン -両方による学習支援の経験-

共通事項

- ・対象: <対 面> 中学3年生、女児、神経疾患（令和2年10月～現在）
<オンライン> 中学3年生、男児、心疾患（令和2年11月～現在）
- ・週1回1時間を目安に実施
- ・英語基礎（主に中学1年生の内容）を行う

対面の体験

- ・学習方法を工夫することの大切さを感じた
- ・学習支援が支援児の心理的支援となることを実感した

オンラインの体験

- ・学習における復習の重要性を感じた
- ・オンライン支援であっても支援場所に制限があることを感じた

対面とオンライン –両方による学習支援の経験–

対面の良さ

- 心理的距離が近い
- 実際に手を動かして覚える作業が行いやすい(かるた、並べ替えなど)
→学習方法の幅が広い

オンラインの良さ

- 遠方に住む子どもたちに行える
- 感染の心配や自粛要請による影響なく継続ができる
- 移動の手間や時間を省くことができ、学習支援のスケジュールも合わせやすい

実際に患児およびご家族に触れ合うことを
経験することの
学生としての意義は大きい



学習支援ボランティアによるアンケート

目的

- ・オンライン及び対面による学習支援における支援効果の比較検討
- ・オンライン支援の利点及び弱点を明らかにすること

対象

令和2年度にオンラインによる学習支援を経験したボランティア8名

＜回答者が受け持ったリモート学習支援児の内訳＞

＜アンケート回答者の内訳＞	
愛媛大学医学科	4 名
愛媛大学看護科	2 名
愛媛大学教育学部	1 名
ラ・ファミリエ職員	1 名
計	8 名

学年	性別	疾患名
小学4年生	女	消化器疾患
中学2年生	男	心疾患
中学3年生	女	小児がん
(2名が担当) 中学3年生	男	心疾患
高校2年生	男	小児がん
高校2年生	女	心疾患、神経疾患
高校2年生	男	膠原病

方法

Wordファイルでアンケートを作成して、令和2年12月に配布し回答を得た

質問内容

以下の項目におけるオンライン及び対面支援の効果の比較 ・学習補完 ・自立支援 ・学生が学習支援ボランティアを行うことへの意義 ・地域差 ・復学支援 ・心理的支援 ・感染症対策	5段階評価
オンライン支援における ・学習支援中の状況、教えやすさ ・オンライン特有の学習法の良さ	5段階評価 及び 自由記述
・オンライン支援において ・困った点 ・上手くいくための工夫点や提案	自由回答

オンライン学習支援の有用性

オンライン特有の有用性

- ・感染症対策
- ・地域差の解消



オンラインでも有用である点(学習支援本来の有用性)

- ・学習補完と復学支援
- ・心理的支援



オンライン学習支援における課題と改善策

1. 学習内容を行いやすくするための工夫

- ・オンラインならではの学習法を活かす

2. 支援児とのコミュニケーション・信頼関係の構築

- ・オンラインの欠点を補うようなコミュニケーション方法

3. 環境の整備

- ・機器・通信環境の充実化
- ・ソフト面におけるサポート

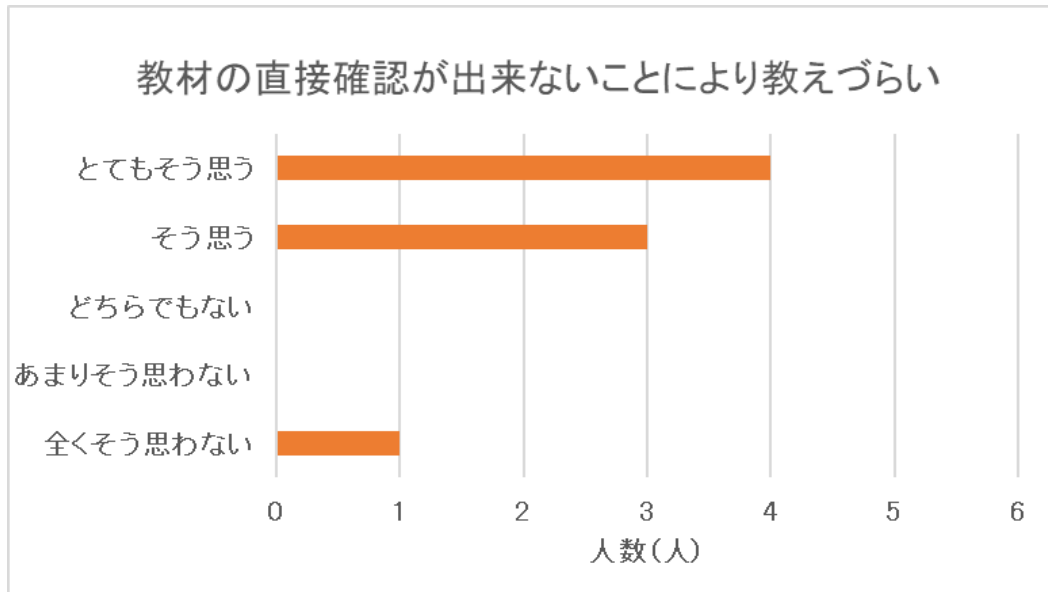


課題 1 学習内容を行いやしくするための工夫

Point

教材が直接扱えないことによる不便

アンケートによると・・・



- ・画面越しで紙面の文章が読みづらい
- ・写真を撮り送る手間が必要



勉強のテンポが崩れる
支援児にもどかしさを与えることも

- ・手元で直接教えなければ出しにくいヒントを伝えられない
- ・資料の手渡しができない



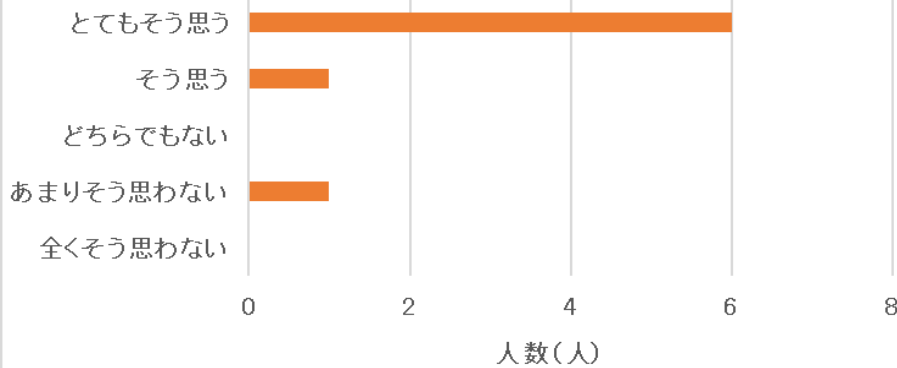
学習法の選択肢が限られる

課題2. 支援児とのコミュニケーション・信頼関係の構築

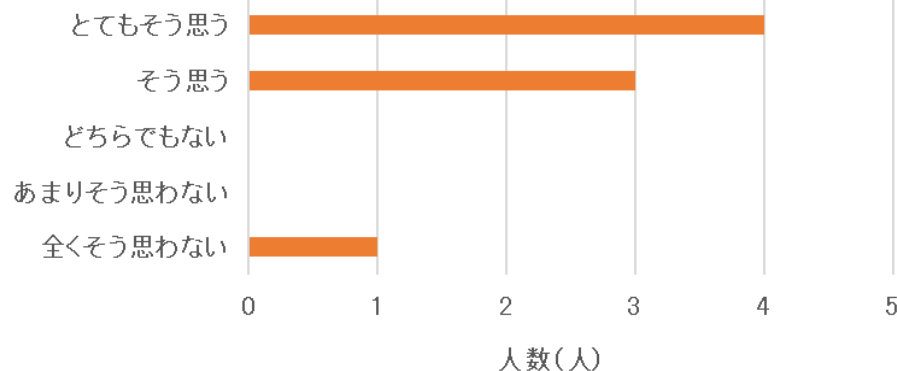
Point

非言語的要素の感じ取りづらさ

支援児の非言語的要素が感じ取りにくい



非言語的要素の感じ取りにくさにより
支援児の体調・理解度がわかりにくい



オンライン の 特質

- ・画質、音質の具合
- ・画面越しで相手の状態を見る
- ・視野が画面内に制限される

非言語的要素が
わかりにくい

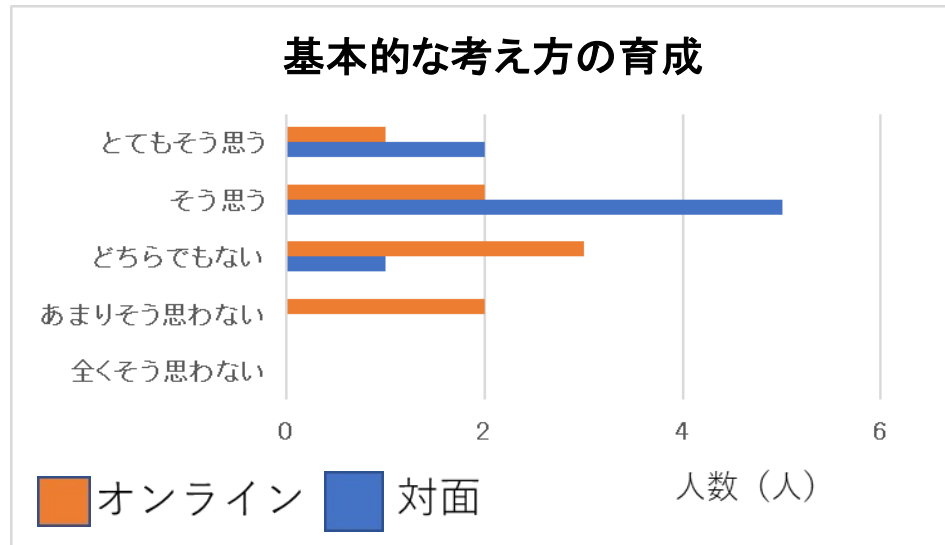
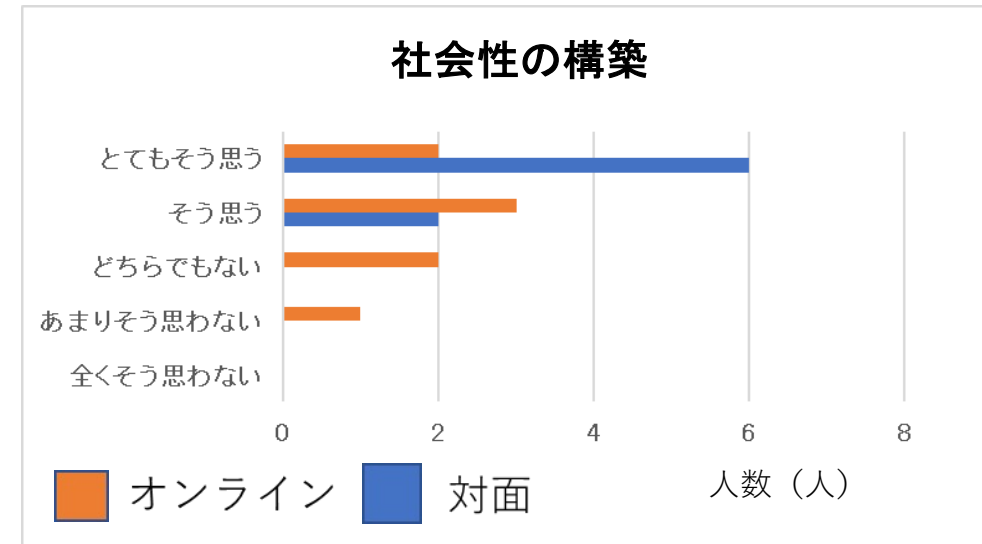
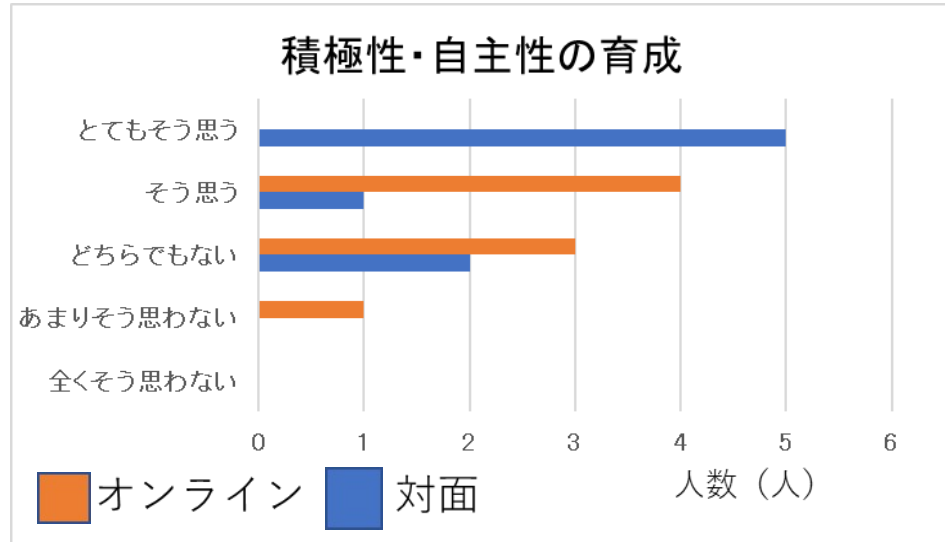
支援児の

- ・体調
- ・集中度、疲労度
- ・理解度
- ・学習の進行速度が適切かがわかりにくい

課題2 支援児とのコミュニケーション・信頼関係の構築

Point

自立支援・心理的支援の行いづらさ



オンラインでは・・・

- ・ 非言語的要素が伝わりづらい
- ・ 学習内容を行うとき以外の支援児の様子（生活習慣など）がわかりにくい
- ・ 同じ空間を共有しているという感覚が欠如する

課題 3 環境の整備

- **機器の扱いに慣れていないことによる不具合**
→ 学習支援の開始・進行に大きく影響すること
- **機器の不足による不便**
→ 機器の充実化が学習内容を行いやすくなることに繋がる
- **通信環境による不具合**
→ 円滑な学習支援を行うことができない、互いのストレスとなる可能性も



機器や通信環境における
充実化の必要性

1 学習内容を行いやすくするための工夫

オンラインならではの学習法を活かす

①アプリ・機器の利用による共有

- ・画面共有、WEBカメラの利用
- ・ノートや教材のデータ共有、共同編集

教材が直接扱えないことによる不便の解消

「ボランティアにとっての板書」
かつ「支援児のノートの代替」にもなる

②その他補助教材アプリの利用

写真補正機能、手書きによる書き込み機能など

③学習アプリの利用

- ・ゲーム感覚で行えるアプリを利用
→支援児の学習へのモチベーションが上がる
- ・自主学習、復習教材として利用しやすい

支援児と相談をして試行錯誤
をしていくことで
支援児にあった学習法を探す
ことが大切

2 支援児とのコミュニケーション・信頼関係の構築

オンラインの欠点を補うようなコミュニケーション法を

- ・こまめに支援児の反応を確認
- ・表情を豊かにする、わかりやすいリアクションをとる
- ・話す声に抑揚をつける
- ・肯定的な言葉がけを意識する



非言語的要素の伝わりにくさ、
理解度のわかりにくさを補う
＋ 信頼関係を築く

アイスブレイクや余暇支援



「遊び」を通じて
コミュニケーションを
円滑に

オンライン特有の弱点を知り、利用することが大切

機器・通信環境の
充実化だけでなく...

3 環境の整備

ソフト面におけるサポート

－ボランティア間による学習支援の方法の共有－

- ボランティアの声を踏まえた、機器操作・学習法などをわかりやすく示したガイドの作成
- 対面あるいはオンライン上で、ボランティア同士の話し合いの場を定期的に設定



学習支援に関する不具合点の認知
知識や工夫の共有

まとめ

1. 対面とオンラインの両方の方法による学習支援を経験した。
2. オンラインによる学習支援をより良いものとするために、アンケート調査を行い知見を得た。
3. 1, 2を通じて**支援の有用性**がわかり、オンライン支援の**課題**として
「**学習内容を行いやすくするための工夫**」
「**支援児とのコミュニケーション・信頼関係の構築**」
「**環境の整備**」が重要であると考えられた。
4. 本研究の限界は、ボランティア側の意識調査であったことである。
学習支援に携わるにおいて、**患児や保護者の実際の想いやニーズを知る必要がある。**